秋　田　市

蟹　子　沢　遺　跡

宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書

1995.3　秋田市教育委員会

序

東北横断自動車道遠野秋田線の路線内に存在する民家の移転先が蟹子沢遺跡内であることから、このたび緊急発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代前期後葉から中期前葉にかけての竪穴住居跡、土壙、焼土遺構等が検出され、集落の一部であることが判明しました。

本報告書はその調査成果をまとめたものであり、文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用いただければ幸甚に存じます。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成にご指導、ご協力くださいました関係各位の皆様に、深く感謝を申しあげます。

平成７年３月

秋田市教育委員会

教育長　石　黒　俊　郎

例　　言

1．本報告書は、宅地造成に伴う蟹子沢遺跡（秋田市濁川字蟹子沢）の発掘調査報告書である。

2．本報告書の執筆は、菅原俊行、石郷岡誠一の助言を得て安田忠市、進藤　靖が行った。

3．発掘調査、整理作業の過程で、下記の各氏より指導、助言を賜った。（敬称略）

冨樫泰時、高橋忠彦、栗澤光男、藤澤　昌（秋田県埋蔵文化財センター）、熊谷太郎（秋田県教育庁文化課）

4．遺構の平面図及び土層断面図中のＰは土器（片）、Ｓは石（礫）を示す。

5．発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目　　次

序

例言

調査の概要…… 1

調査に至るまでの経過…… 1

調査期間と体制…… 1

調査の方法と経過…… 2

遺跡の位置と地形・地質…… 2

遺跡の概観…… 4

周辺の遺跡…… 4

調査の記録…… 9

基本土層…… 9

遺構と遺物…… 9

まとめ……19

調査区全景（西→）

１号住居跡（西→）

調査の概要

調査に至るまでの経過

東北横断自動車道遠野秋田線は蟹子沢遺跡の北端を通る路線が設定されている。この路線内には民家が存在し、この民家は南側隣接地を移転先とした。しかし、移転先は周知の遺跡である蟹子沢遺跡内（秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書　秋田市教育委員会　1989年３月）であることから、秋田市教育委員会に遺跡範囲確認調査が依頼された。

秋田市教育委員会は平成６年４月に遺跡範囲確認調査を実施した。その結果、遺構及び遺物が確認されたことにより発掘調査面積を確定した。そして、秋田県教育委員会を交えて移転先の変更や、当該遺跡の保護について協議した。しかし、移転先の変更は不可能なことと、着工時期が迫っていることなどから発掘調査を実施し、遺跡を記録保存することにした。

調査期間と体制

調　査　期　間　平成６年６月１日～６月29日

調　査　面　積　600m²

調査担当者　秋田市、秋田市教育委員会

調　査　体　制　秋田市教育委員会文化課

課　　長　大原　重美

参　　事　木川　久夫

課長補佐　菅原　俊行

文化財係長　石郷岡誠一

文化財保護主事　安田　忠市（調査担当）

主　　事　佐々木　清

嘱　　託　進藤　　靖（調査担当）

調査協力員　五十嵐芳郎（秋田考古学協会）、船木征四郎

調査作業員　鎌田浩充、神田松夫、三浦　卓、佐々木敏雄、高橋喜久夫、児玉　保、堀井清光、渡辺隆美、橋本武美、菅原哲郎、佐々木克雄、舘本武雄、伊藤政信、長谷川雄美、村越房一、佐藤政勝、鎌田てい子、松田フサ

整理作業員　伊藤秀子

調査協力機関　日本道路公団仙台建設局秋田工事事務所

秋田県土木部高速道路対策事務所

秋田県教育庁文化課

秋田県埋蔵文化財センター
藤建設

調査の方法と経過

調査区の北側で秋田県埋蔵文化財センターが実施している発掘調査のグリッドを、本調査区へ延長して設定した。秋田県埋蔵文化財センターのグリッド設定方法は、調査区内に任意の点１箇所を選定し、この基準杭から南北基線とこれに直交する東西基線に４×４ｍのグリッドを設定する。本調査区のグリッドは、東西方向（Ｘ軸）に東から２文字のアルファベット（ＬＰ、ＬＱ、ＬＲ・・・）を、南北方向（Ｙ軸）に南から２桁の数字（31、32、33・・・）を配し、その組み合わせをグリッド名とした。

発掘調査は６月１日から６月29日の日程で実施した。６月１日、機材を搬入し、調査を開始。バックホーによる表土除去作業開始。６月２日、グリッドを設定し、第Ⅱ、Ⅲ層（遺物包含層）の掘り下げ開始。６月16日、遺構調査を開始。６月14日、平面実測、地形測量を開始。６月27日、調査区全景、遺構の写真撮影実施。６月29日、機材を撤去して調査を終了。

遺跡の位置と地形・地質

遺跡の位置

遺跡は秋田市の北東部にあたる秋田市濁川字蟹子沢に所在する。秋田市街からは主要地方道秋田・八郎潟線の添川字添川にある添川橋を過ぎた所で左折し、主要地方道秋田・昭和線を約600ｍ北上して坂を登りきった左側の標高約45ｍの段丘上に位置する。

北緯39°45′17″、東経140°8′15″で、ＪＲ東日本秋田駅から北へ約4.5km、日本海から約７km内陸へ入った地点である。

遺跡の地形・地質

遺跡は上新城丘陵の南西端に位置する。この上新城丘陵は標高60～200ｍのかなり開析を受けた地形で、谷密度は30～50／km²、また、起伏量は100～150／km²の地域が大部分を占めている。

地質は第三紀中新世の暗灰色泥岩（船川層）、鮮新世に属する青色砂質シルト（笹岡層）、同じく青灰色泥岩（天徳寺層）等からなっている。

遺跡の南側を流れている旭川沿いには、３段の段丘が認められる。上位は湯沢地区北方の標高80～100ｍの面で、上新城丘陵の中では一番高い面である。かなり開析を受け、分布は大変局部的である。中位は藤倉及び松原地区北方で、標高70～80ｍの面が細長く分布している。この面もかなり開析を受けているが一応連続した面をもっている。低位は湯沢地区付近の標高50～60ｍの平坦な面で、この面はあまり開析を受けていない。構成層は最大径10cmの礫を含む砂礫層である。

第１図　遺跡の位置

なお、旭川は雄物川の支流で太平山の西側に源を発し、秋田市街地を貫流して太平川、秋田運河へ注ぐ延長約25mの河川である。

参考文献
経済企画庁総合開発局国土調査課：「土地分類基本調査　地形・表層地質・土じょう　秋田」 1966年３月

遺跡の概観

遺跡は上新城丘陵の南西端、南北に延びる舌状台地に立地し、範囲は南北500m、東西60～180mと推定される。

調査区は遺跡の北東部で、台地の縁辺部である。調査区の北西側は平坦面であるが、南・東側は緩斜面である。標高は約45mで、現水田面である沖積低地との比高差は約28mである。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡、土壙、焼土遺構等が、平坦面及び斜面から検出された。

隣接する遺跡は南東約400mに縄文・平安時代の「飛鳥田遺跡」、南東約800mに縄文・平安時代の「戸平川遺跡」、南約１kmに縄文時代の「地ノ内Ⅰ遺跡」等の関連遺跡が所在する。

周辺の遺跡（第２図）

昭和61～63年度に秋田市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査[註1]に基づいて、旭川流域の遺跡について概観したい。

旧石器時代

１遺跡のみの確認で、分布調査時に「古城廻Ⅱ遺跡（４）」から石刃を１点採集している。

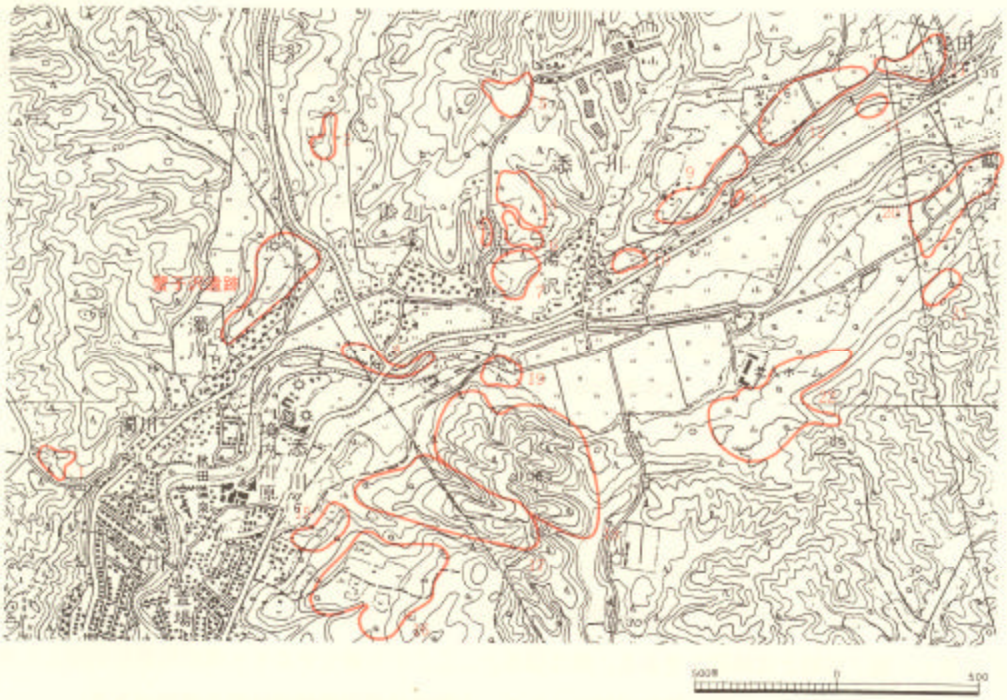
縄文時代

「湯沢台Ⅱ遺跡[註2](10)」は中期の遺跡で、土器及び石器（石鏃、石匙、ヘラ状石器、磨製石斧、くぼみ石）を採集している。「戸平川遺跡[註3](19)」は晩期の遺跡で、土器（壺形土器、皿形土器、浅鉢形土器）及び石器（石鏃、石匙）を採集している。

「大堤遺跡（１）」、「飛鳥田遺跡（８）」、「湯沢台Ⅰ遺跡（９）」、「湯沢台Ⅱ遺跡(10)」、「湯沢台Ⅲ遺跡(11)」、「湯沢台Ⅳ遺跡(12)」、「地ノ内Ⅰ遺跡(15)」、「地ノ内Ⅱ遺跡(16)」、「鶴木台Ⅰ遺跡(20)」、「鶴木台Ⅱ遺跡(21)」、「鶴木台Ⅲ遺跡(22)」からは、分布調査時に縄文土器及び石器等を採集している。

弥生時代

周辺では確認されていないが、北方の上新城地区で数遺跡から遺物が発見されている。



番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構・遺物
1	大堤	秋田市外旭川字大堤	遺物包含地	縄文	縄文土器
2	太田	〃 添川字太田83	〃	奈良、平安	須恵器、赤褐色土器
3	古城廻 I	〃 〃 字古城廻	〃	平安	赤褐色土器
4	〃 II	〃 〃 〃	〃	旧石器、奈良、平安	石器、須恵器、赤褐色土器、鉄滓
5	〃 III	〃 〃 〃	〃	平安	焼土遺構
6	古城廻窯跡	〃 〃 〃	窯跡	奈良、平安	瓦、須恵器
7	添川館	〃 〃 〃	城館	中世	
8	飛鳥田	〃 〃 字飛鳥田	遺物包含地	縄文、平安	縄文土器、赤褐色土器
9	湯沢台 I	〃 〃 字湯沢台	〃	縄文、奈良、平安	縄文土器、石鏃、須恵器、赤褐色土器
10	〃 II	〃 〃 〃	〃	縄文	縄文土器、石器
11	〃 III	〃 〃 〃	〃	縄文	縄文土器、石器
12	〃 IV	〃 〃 〃	〃	縄文、奈良、平安	縄文土器、石器、須恵器
13	蓬田	〃 〃 字蓬田	〃	奈良、平安	土師器、須恵器
14	長田	〃 〃 字長田	〃	奈良、平安	須恵器
15	地ノ内 I	〃 〃 字地ノ内	〃	縄文	縄文土器
16	〃 II	〃 〃 〃	〃	縄文	縄文土器
17	地ノ内館	〃 〃 〃	城館	中世	郭、腰郭、帯郭、空堀
18	天館	〃 〃 字戸平川	〃	中世	郭、腰郭、空堀、竪堀
19	戸平川	〃 〃 〃	遺物包含地	縄文、平安	縄文土器（壺形土器、皿形土器、浅鉢形土器）
20	鶴木台 I	〃 〃 字鶴木台	〃	縄文	縄文土器
21	〃 II	〃 〃 〃	〃	縄文	縄文土器、石器
22	〃 III	〃 〃 〃	〃	縄文、奈良、平安	縄文土器、須恵器、赤褐色土器

第2図　周辺の遺跡

古代

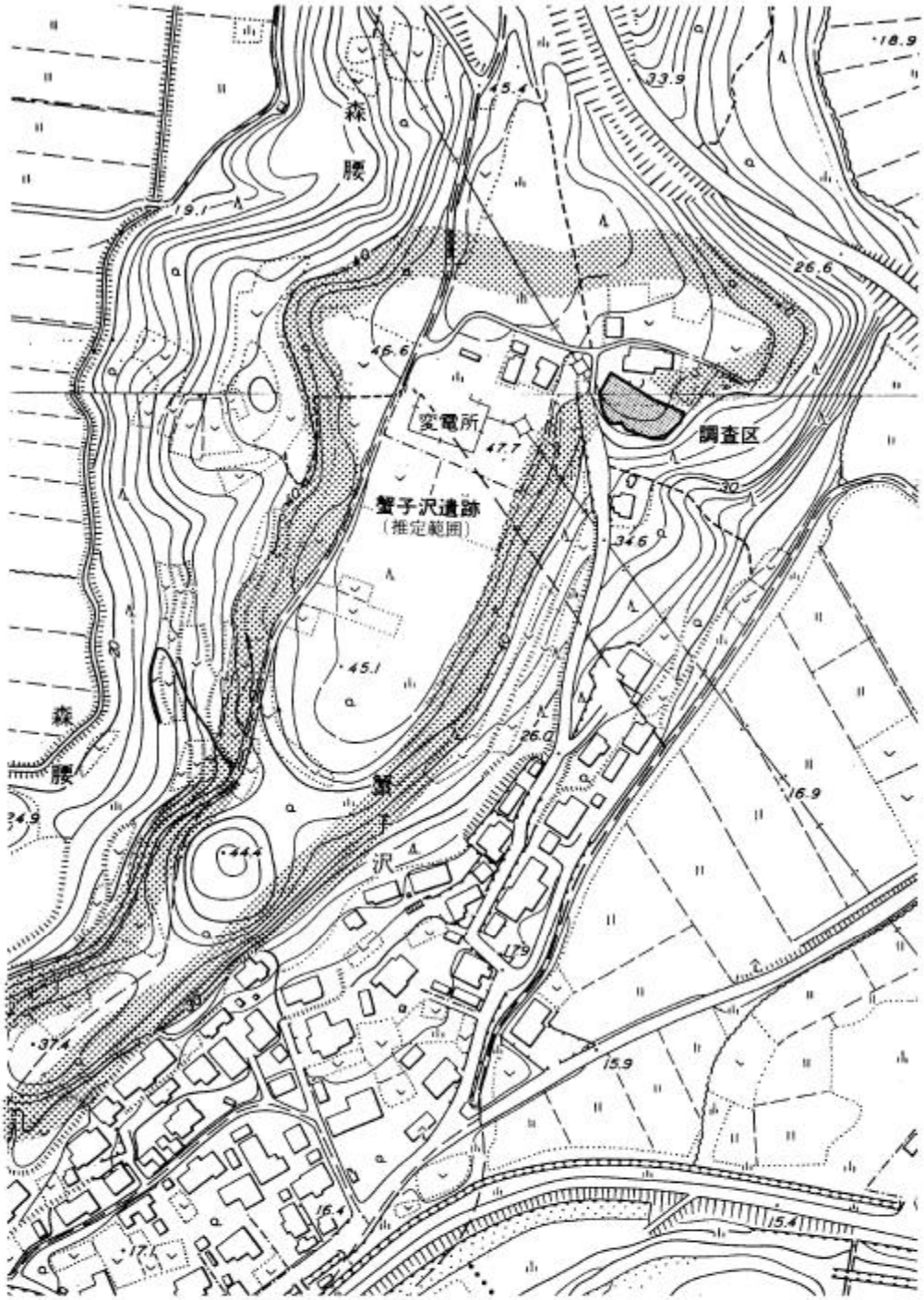
「古城廻窯跡(註4)(6)」は、平成5年に秋田市教育委員会が秋田市史編さん資料調査のための学術調査として登窯1基を調査した。調査の結果、平瓦、丸瓦、軒丸瓦、須恵器坏（底部切り離し回転ヘラ切り無調整、底部切り離し回転糸切り無調整）・高台坏・双耳坏・蓋・甕等が出土し、平安時代前半の登窯であることが判明した。西方約5.5kmに位置する秋田城の瓦を焼成した瓦陶併焼の窯跡と考えられている。「蓬田遺跡(註5)(13)」からは土師器甕・鉢、須恵器、土製品の破片を採集している。

「太田遺跡(2)」、「古城廻Ⅰ遺跡(3)」、「古城廻Ⅱ遺跡(4)」、「古城廻Ⅲ遺跡(5)」、「飛鳥田遺跡(8)」、「湯沢台Ⅰ遺跡(9)」、「湯沢台Ⅳ遺跡(12)」、「長田遺跡(14)」、「戸平川遺跡(19)」、「鶴木台Ⅲ遺跡(22)」からは、分布調査時に土師器、須恵器、赤褐色土器等を採集している。

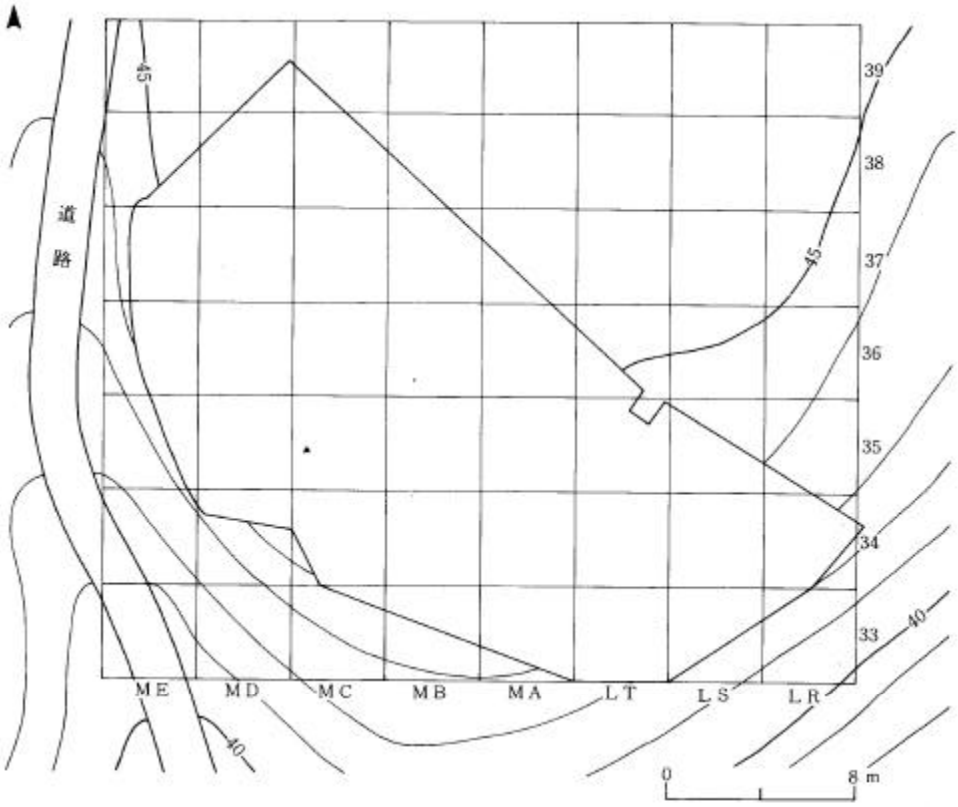
中世

「添川館(註6)(7)」は旭川右岸の標高約40mにあった旧添川小学校跡地と考えられるが、校舎建築の際に破壊されている。「地ノ内館(註7)(17)」は旭川左岸の標高約90mに位置する。館は単郭で、西側に2段の腰郭、北・南側に帯郭、北側に空堀が認められる。「天館(註8)(18)」は旭川左岸の標高約100mに位置し、地ノ内館とは峰続きである。館は頂部と、ここから派生する6ケ所の尾根を利用した連郭からなり、郭、腰郭、空堀、竪堀が認められる。本館跡は旭川流域では最大規模である。

註1　「秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書」　秋田市教育委員会　1989年3月
註2　「秋田市湯沢字湯沢台」　五十嵐芳郎　遺跡とその資料Ⅲ 1965年秋田市とその周辺　1965年
　　「環状　第4号」　秋田県埋蔵文化財保護サークル「環状」　1982年3月
註3　「秋田市添川字戸平川」　五十嵐芳郎　遺跡とその資料Ⅱ 1964年秋田市とその周辺　1964年
　　「秋田市周辺の縄文晩期末及後続期の遺跡概要」　奥山　潤　秋田考古学22号　秋田考古学協会　1963年9月
註4　「古城廻窯跡発掘調査概要」　伊藤武士　平成6年度秋田考古学協会研究会資料　秋田考古学協会　1994年9月
註5　「秋田市湯沢字蓬田」　五十嵐芳郎　遺跡とその資料Ⅲ 1965年秋田市とその周辺　1965年
註6　「秋田県の中世城館」　秋田県文化財調査報告書第86集　秋田県教育委員会　1981年3月
註7　註6に同じ
註8　註6に同じ



第３図　遺跡周辺の地形

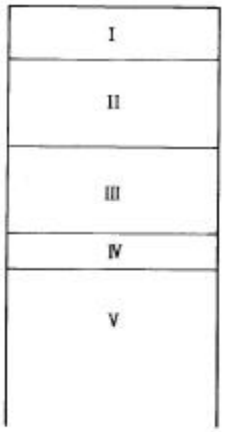


第4図　グリッド配置図

調査の記録

基本土層（第５図）

基本土層は、第Ⅰ層 表土（盛土、整地）、第Ⅱ層 暗褐色土（炭化物・ローム粒子混入）、第Ⅲ層 黒褐色土（炭化物混入）、第Ⅳ層 暗黄褐色土、第Ⅴ層 黄褐色土で、第Ⅱ、Ⅲ層が遺物包含層、第Ⅳ層がローム漸移層、第Ⅴ層がローム層（地山）である。



第５図　基本土層柱状図

遺構と遺物

検出遺構は竪穴住居跡１軒、土壙13基、焼土遺構２基、ピット等で、全て地山面での確認である。

竪穴住居跡

１号住居跡（第６図）

調査区中央部の斜面で検出された。

平面形は北半のみの確認であるが、楕円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは20～30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは住居内外に13個検出されたが、主柱穴は不明である。炉は地床炉で、強く火熱を受けている。床は２段構造で、壁から約１ｍ内側に段が付く。床面はほぼ平坦で堅い。

出土遺物

土器（第10図１～５）

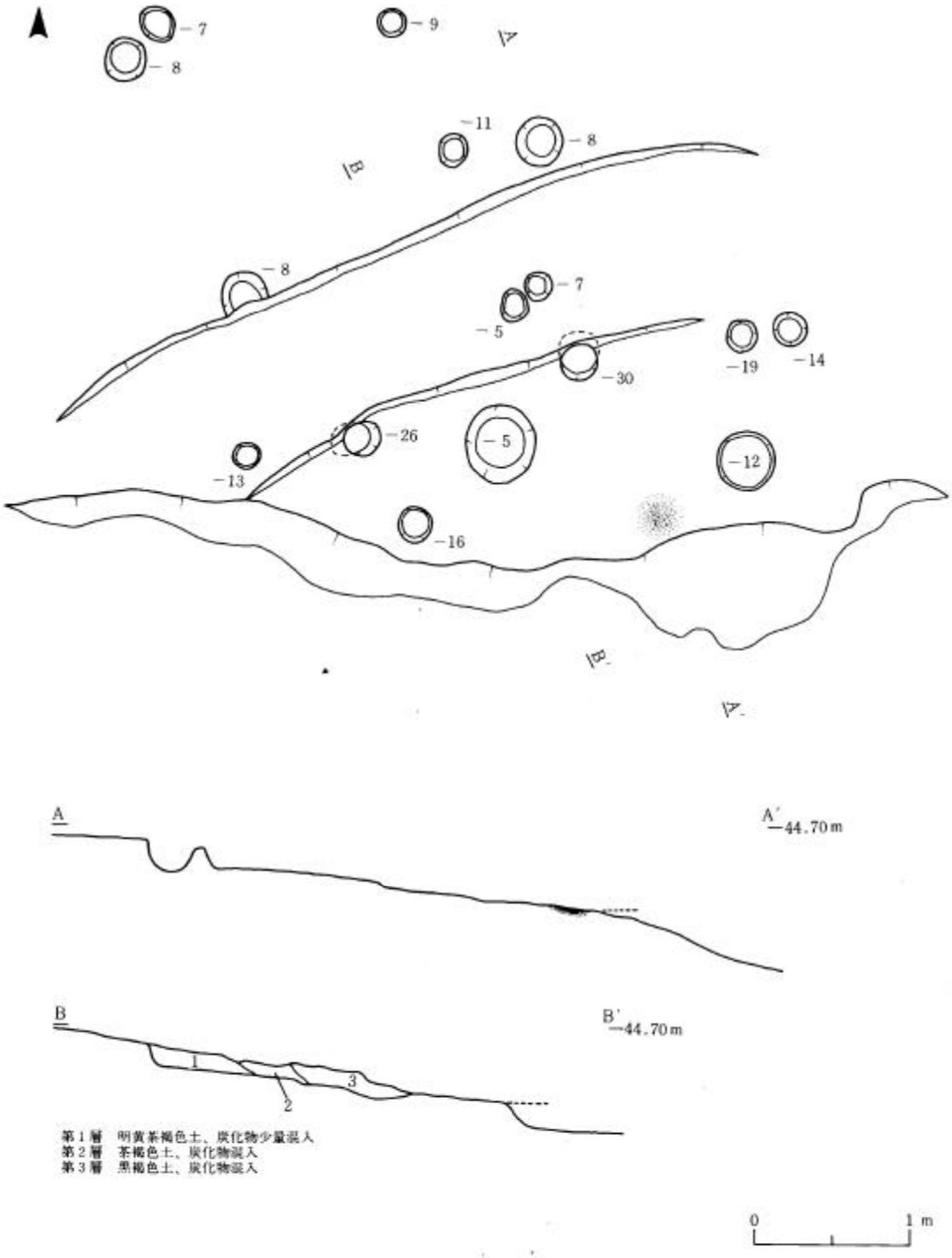
２は床面、他は覆土出土である。１は深鉢形土器の胴部で、地文はＬＲ・ＲＬ単節原体を用いた結束羽状縄文である。２は深鉢形土器の胴部で、地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。３は深鉢形土器の口縁部である。平縁口縁で、文様は摩滅により明確に観察できない。４は深鉢形土器の口縁部である。平縁口縁で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。また、縄文原体の開端部を別の紐で結んだと考えられる文様が認められる。５は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。

他に縄文土器片が少量出土している。

石器（第11図１）

１は床面出土の半円状扁平打製石器である。扁平な自然礫の１側縁に両面加工を施すもので、石質は安山岩である。

他に石器剥片が１点出土している。


−7
−8
−9
−11
−8
−8
−7
−5
−30
−19
−14
−26
−5
−12
−13
−16
A
A'
44.70m
B
B'
44.70m
1
2
3
第1層　明黄茶褐色土、炭化物少量混入
第2層　茶褐色土、炭化物混入
第3層　黒褐色土、炭化物混入
0
1 m

第6図　1号住居跡

土壙

１号土壙（第７図）

調査区北西部の平坦面で検出された。

プランは長軸190cm、短軸120cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは25cmである。壁は緩く立ち上がり、底面は丸みがある。

出土遺物

土器（第10図６～10）

全て覆土出土である。６、７は同一固体で、鉢形土器の頸部及び体部である。口縁部が「く」の字状に外傾し、地文はＬＲ・ＲＬ単節原体による羽状縄文である。８～10は同一固体で、鉢形土器の８は口縁部、９、10は体部である。口縁は折り返し口縁で、体部地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。

他に縄文土器片が少量、石器剥片が数点出土している。

２号土壙（第７図）

調査区中央部の斜面で検出された。

プランは長軸110cm、短軸100cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは15cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

遺物は縄文土器片が数点出土している。

３号土壙（第７図）

調査区中央部の斜面で検出された。

プランは長軸80cm、短軸70cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第10図11～13）

全て覆土出土である。11は鉢形土器の口縁部である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、口唇部に棒状工具による刻目文が認められる。地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。12は深鉢形土器の胴部で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。13は深鉢形土器の胴部である。地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）で、条間があいている。

他に縄文土器片が数点、石器剥片が１点出土している。

４号土壙（第７図）

調査区中央部の平坦面で検出され、５号土壙を切っている。

プランは長軸80cm、短軸60cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは30cmである。壁は緩く立ち上がり、底面は丸みがある。

出土遺物

石器（第11図２）

２は覆土出土のくぼみ石である。自然礫の両面にくぼみ部が数ケ所認められるものである。

他に縄文土器片が２点出土している。

５号土壙（第７図）

調査区中央部の平坦面で検出され、４号土壙に切られている。

プランは長軸80cm、短軸70cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

遺物の出土はなかった。

６号土壙（第７図）

調査区中央部の平坦面で検出された。

プランは長軸90cm、短軸50cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは55cmである。壁は南・西側が内傾して立ち上がり、底面は両端がピット状に掘り込まれている。

出土遺物

土器（第10図14、15）

いずれも覆土出土である。14は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。15は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。

他に縄文土器片が10数点、石器剥片が数点出土している。

７号土壙（第７図）

調査区西部の平坦面で検出された。

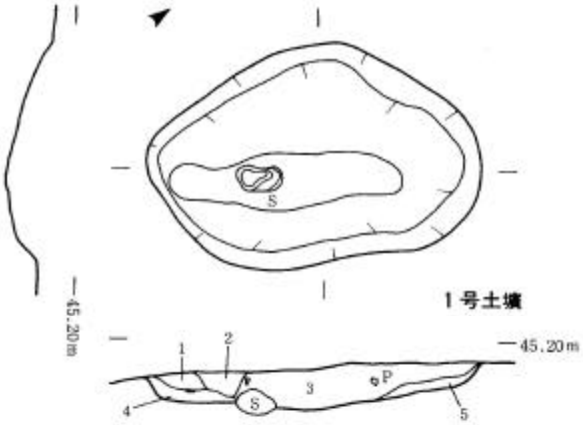
プランは径60cmの円形を呈し、確認面からの深さは25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

遺物の出土はなかった。

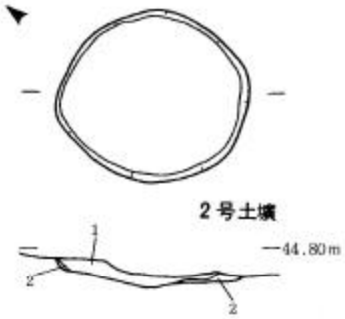
８号土壙（第７図）

調査区北西部の平坦面で検出された。

プランは長軸80cm、短軸70cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

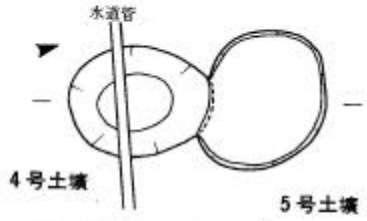


第1層　黒褐色土、堅くしまっている、炭化物少量混入
第2層　黒褐色土、明褐色土ブロック少量混入
第3層　黒褐色土、堅くしまっている、明褐色土ブロック少量・炭化物混入
第4層　黒褐色土、灰褐色土混入
第5層　明黄褐色土、黒褐色土ブロック混入



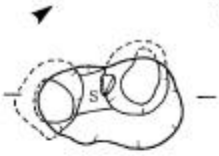
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土、炭化物少量混入

第1層　黒褐色土、堅くしまっている、黄褐色土ブロック混入
第2層　黒褐色土、堅くしまっている、粘性大、炭化物多量混入
第3層　黒褐色土、黄褐色土混入
第4層　黒褐色土、明黄褐色土ブロック多量混入

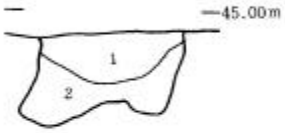


第1層　水道管埋設土
第2層　黒褐色土、ボソボソ、明黄褐色土混入
第3層　黒褐色土、明褐色土小ブロック少量・炭化物少量混入
第4層　明褐色土、粘土質
第5層　黒褐色土、堅くしまっている、明黄褐色土・炭化物少量混入

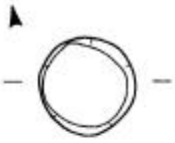
第1層　褐色土、堅くしまっている、明黄褐色土ブロック・炭化物少量混入



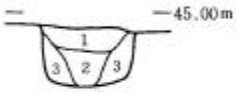
6号土壙



第1層　黒褐色土、堅くしまっている、炭化物混入
第2層　黒褐色土、堅くしまっている、黄褐色土、ロームブロック少量・炭化物混入



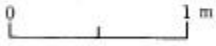
7号土壙



第1層　黒褐色土、堅くしまっている、黄橙色土小ブロック多量・炭化物少量混入
第2層　黒褐色土、堅くしまっている、黄橙色土土ブロック多量・炭化物多量混入
第3層　黒褐色土、明褐色土・黄橙色土ブロック・炭化物混入

8号土壙

第1層　黒褐色土、黄橙色土ブロック少量・炭化物混入
第2層　黒褐色土、黄褐色土ブロック・炭化物多量混入



第7図　土壙

遺物は縄文土器片が数点出土している。

9号土壙（第8図）

調査区東部の斜面で検出され、13号土壙を切っている。

プランは長軸160cm、短軸150cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは100cmである。壁は内湾気味に立ち上がり、断面形は袋状をなす。底面は平坦である。

遺物は縄文土器片が1点出土している。

10号土壙（第8図）

調査区東部の斜面で検出された。

プランは長軸140cm、短軸120cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは80cmである。壁は南側がほぼ垂直に他は内湾気味に立ち上がり、断面形は袋状をなす。底面は平坦である。

遺物の出土はなかった。

11号土壙（第9図）

調査区東部の斜面で検出された。

プランは長軸250cm、短軸230cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは100cmである。口壙部は広く作られており、段状をなしている。壁は内湾気味に立ち上がる部分もあり、断面形は若干袋状をなす。底面は平坦である。

遺物は縄文土器片が2点、石器剥片が1点出土している。

12号土壙（第9図）

調査区中央部の斜面で検出された。

プランは径70cmの円形を呈し、確認面からの深さは40cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みがある。

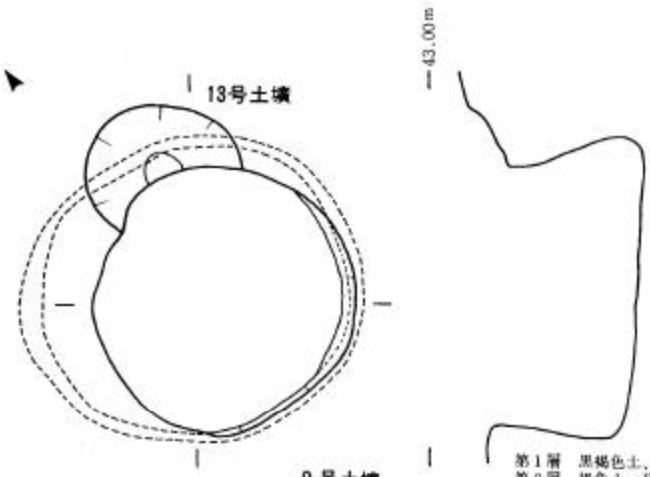
遺物の出土はなかった。

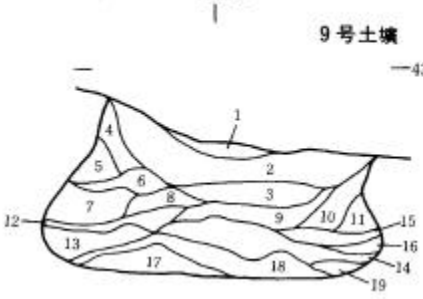
13号土壙（第9図）

調査区東部の斜面で検出され、9号土壙に切られている。

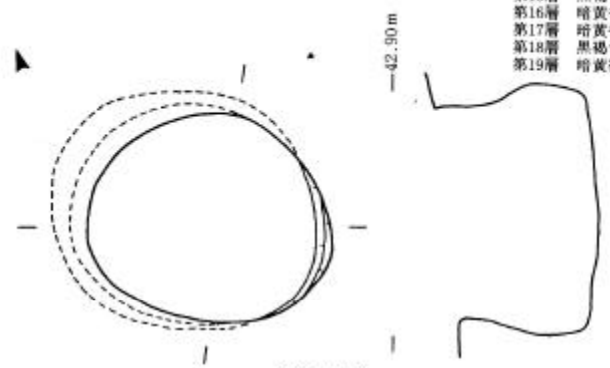
プランは長軸90cm、推定短軸80cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは20cmである。壁は緩く立ち上がり、底面は丸みがある。

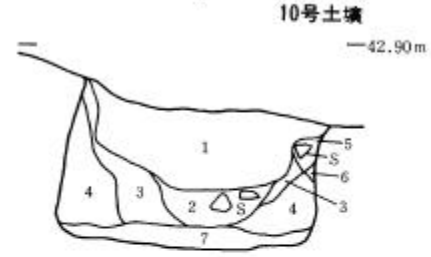
遺物の出土はなかった。





第1層　黒褐色土、炭化物少量混入
第2層　褐色土、炭化物少量・小、中礫（1～10cm）多量混入
第3層　明褐色土、小、中礫（1－10cm）多量混入
第4層　褐色土、粘性あり、黄褐色土混入
第5層　黄褐色土、粘土質
第6層　黒褐色土、炭化物少量混入
第7層　黄褐色土、粘土質、第5層より粘性大
第8層　黒褐色土、ロームブロック・炭化物少量・小礫（1～5cm）混入
第9層　褐色土、炭化物少量・小、中、大礫（1～20cm）多量混入
第10層　褐色土、黄褐色土・小礫（1－5cm）混入
第11層　黄褐色土、褐色土混入
第12層　黒褐色土、粘性大、黄褐色土混入
第13層　暗黄褐色土、粘性大
第14層　褐色土、ローム小ブロック・炭化物・小、中、大礫（1～20cm）多量混入
第15層　黒褐色土、黄褐色土・炭化物少量混入
第16層　暗黄褐色土、粘性あり
第17層　暗黄褐色土、粘性大
第18層　黒褐色土、炭化物少量・小礫（1～5cm）混入
第19層　暗黄褐色土、粘性ややあり

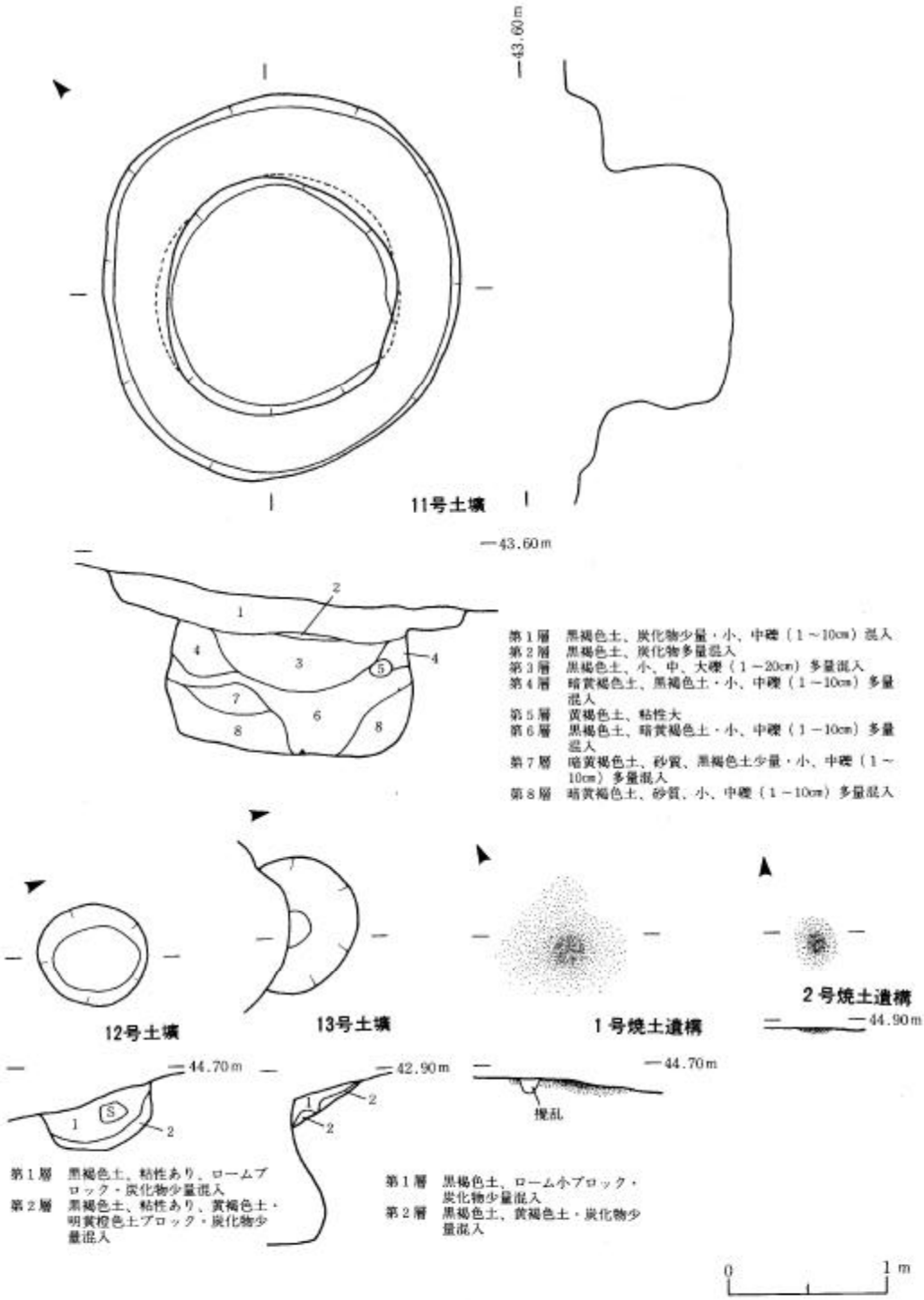




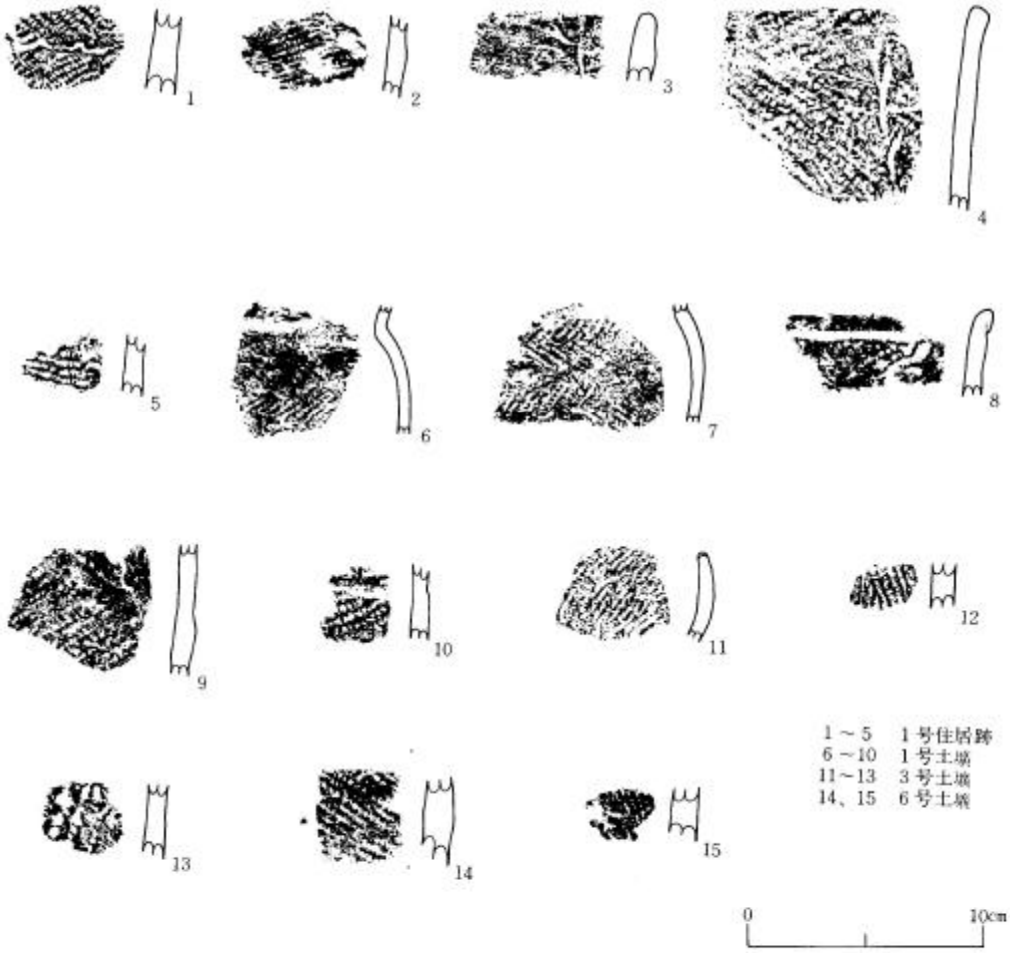
第1層　黒褐色土、炭化物少量・小礫（1～5cm）多量混入
第2層　黒褐色土、炭化物少量・中、大礫（5～20cm）混入
第3層　黒褐色土、黄褐色土・炭化物少量混入
第4層　黄褐色土、粘土質
第5層　暗黄褐色土、小、中、大礫（1～20cm）多量混入
第6層　暗黄褐色土、砂質
第7層　黒褐色土、粘性あり、炭化物・小、中礫（1－10cm）混入

0　1m

第8図　土壙


43.60m
11号土壙
43.60m
第1層　黒褐色土、炭化物少量・小、中礫（1～10cm）混入
第2層　黒褐色土、炭化物多量混入
第3層　黒褐色土、小、中、大礫（1－20cm）多量混入
第4層　暗黄褐色土、黒褐色土・小、中礫（1－10cm）多量混入
第5層　黄褐色土、粘性大
第6層　黒褐色土、暗黄褐色土・小、中礫（1－10cm）多量混入
第7層　暗黄褐色土、砂質、黒褐色土少量・小、中礫（1－10cm）多量混入
第8層　暗黄褐色土、砂質、小、中礫（1－10cm）多量混入
12号土壙
13号土壙
1号焼土遺構
2号焼土遺構
44.90m
44.70m
42.90m
44.70m
撹乱
第1層　黒褐色土、粘性あり、ロームブロック・炭化物少量混入
第2層　黒褐色土、粘性あり、黄褐色土・明黄橙色土ブロック・炭化物少量混入
第1層　黒褐色土、ローム小ブロック・炭化物少量混入
第2層　黒褐色土、黄褐色土・炭化物少量混入
0
1m

第9図　土壙



第10図　遺構内出土土器

焼土遺構

1号焼土遺構（第9図）

調査区中央部の斜面で検出された。

焼痕は径80cmの不整形を呈し、強く火熱を受けている。

2号焼土遺構（第9図）

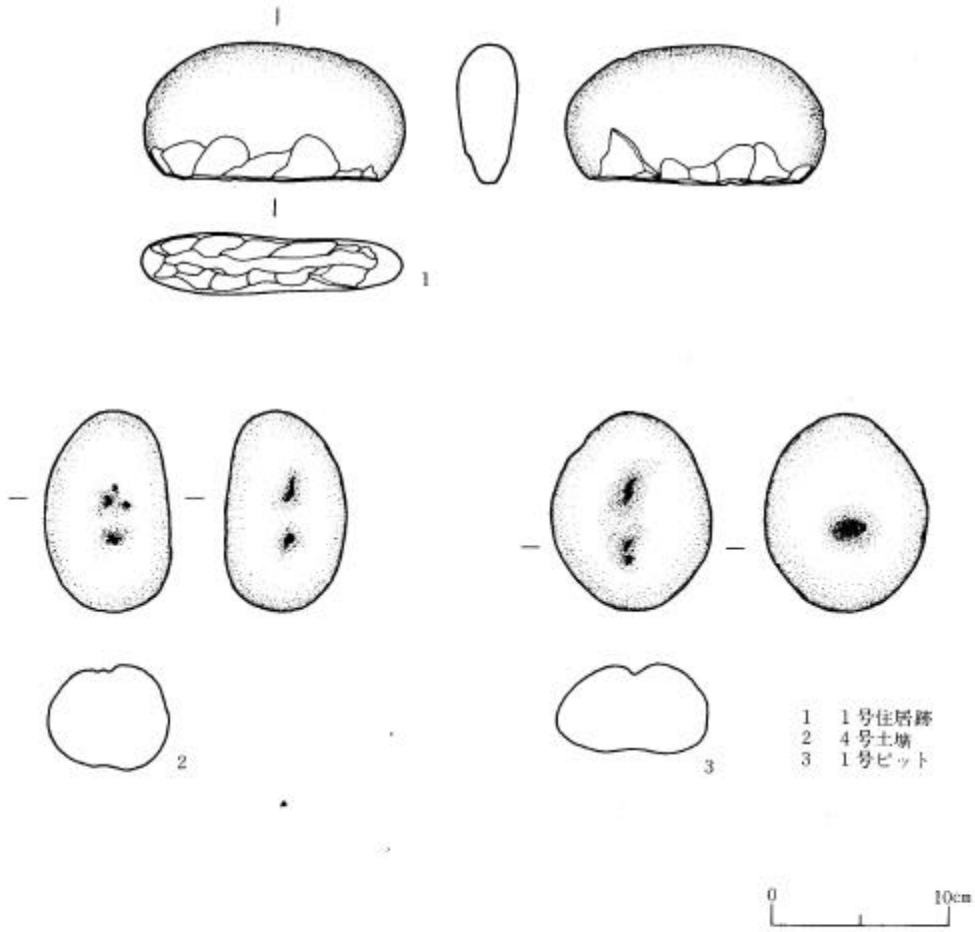
調査区中央部の平坦面で検出された。

焼痕は長軸35cm、短軸25cmの楕円形を呈し、強く火熱を受けている。

ピット群

調査区の西部、中央部、東部で検出された。

径20～30cm、深さ10～20cmの柱穴状を呈するものである。



第11図　遺構内出土土器

出土遺物

石器（第11図３）

１号ピット出土のくぼみ石である。自然礫の両面にくぼみ部が数ケ所認められるものである。

遺構外出土土器

縄文土器片が数点出土したのみである。全て地文のみであり、また摩滅が著しく図示しえなかった。

遺構外出土石器

石器剥片が数点出土したのみである。

まとめ

蟹子沢遺跡は上新城丘陵の南西端に位置し、調査区は南北に延びる舌状台地の北東部である。

調査の結果、検出遺構は竪穴住居跡１軒、土壙13基、焼土遺構２基で、出土遺物は土器、石器である。土器は全て破片であり、縄文地文のみのものがほとんどである。このような状況で明確に時期を特定するのは困難であるが、若干の検討を加えてみたい。

竪穴住居跡は１軒のみの検出である。斜面であることから北半のみの確認であるが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。炉は地床炉で、床面は２段構造をなすものである。このような形態の類例は、秋田市御所野丘陵部遺跡群「坂ノ上Ｅ遺跡[註1]」、「坂ノ上Ｆ遺跡[註2]」、「狸崎Ａ遺跡[註3]」、「台Ａ遺跡[註4]」、「下堤Ａ遺跡[註5]」、仙北郡協和町「上ノ山Ⅱ遺跡[註6]」、能代市「杉沢台遺跡[註7]」等で検出されている。秋田市御所野丘陵部遺跡群では縄文時代中期初頭から中葉にかけて、「上ノ山Ⅱ遺跡」では縄文時代前期中葉から後葉にかけて、「杉沢台遺跡」では縄文時代前期後葉から中期初頭にかけての時期に検出されている。また、竪穴住居跡の床面からは半円状扁平打製石器が１点出土している。この半円状扁平打製石器は円筒式土器に伴う遺物で、縄文時代前・中期に出土している。

調査区北側で秋田県埋蔵文化財センターが実施した東北横断自動車道遠野秋田線建設に伴う発掘調査[註8]では、縄文時代前期後葉から中期前葉にかけての竪穴住居跡や、縄文時代中・後期及び晩期の土器埋設遺構が検出され、古代の土器も出土している。

以上のことから、本遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡で、本調査区は遺構と遺物から縄文時代前期後葉から中期前葉にかけての時期が考えられる。また、本調査区は遺跡の北東部という位置的なことなどから遺跡の全容を把握するには至らなかったが、集落の一部分であると推測される。今後は秋田県埋蔵文化財センターの調査結果や、本遺跡の南・西側の未調査地及び周辺遺跡の調査を含めて遺跡の性格を検討する必要があると考えられる。

註１　「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　坂ノ上Ｅ遺跡」　秋田市教育委員会　1984年３月

註２　「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　坂ノ上Ｆ遺跡」　秋田市教育委員会　1985年３月

註３　「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　狸崎Ａ遺跡」　秋田市教育委員会　1985年３月

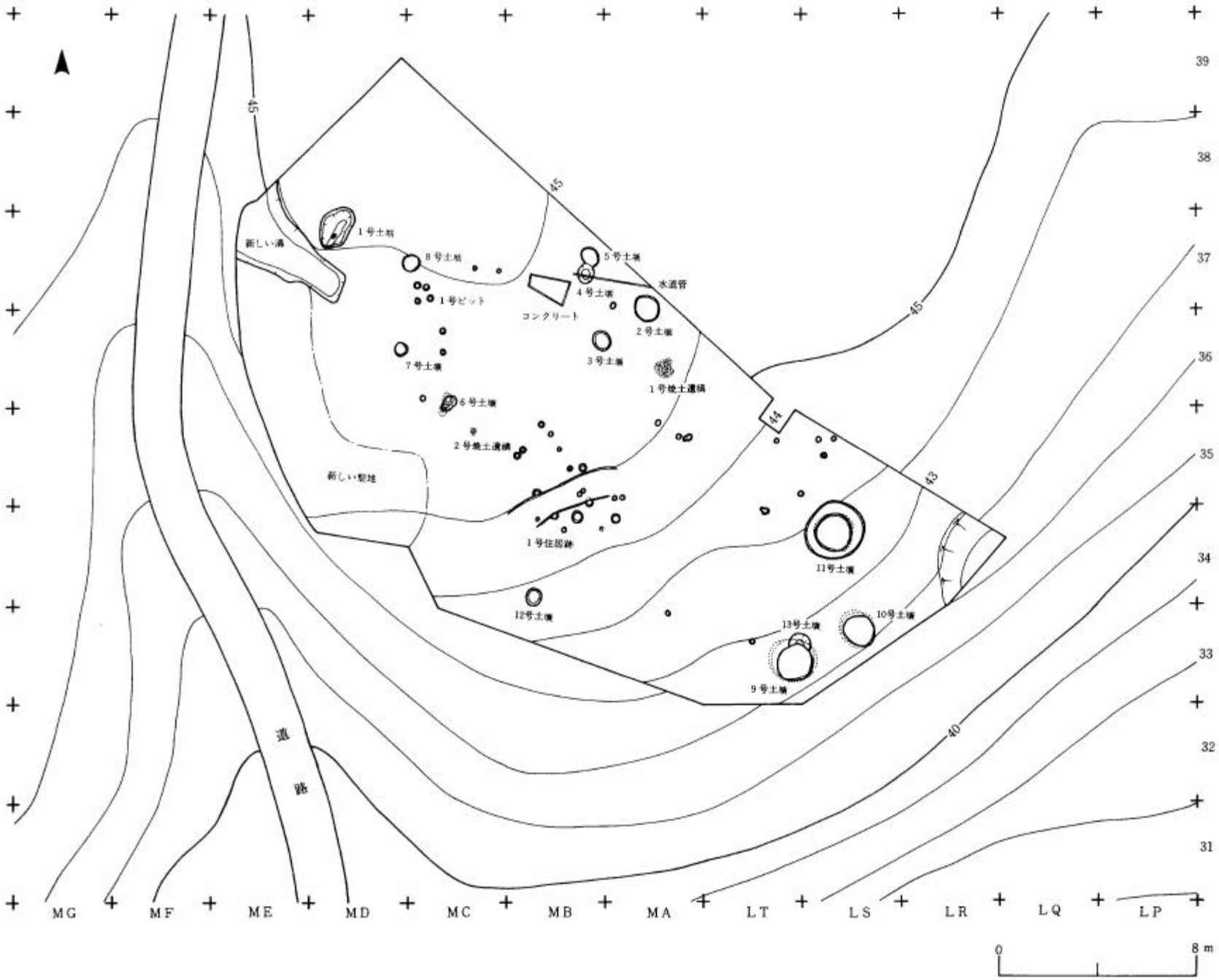
註４　「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　台Ａ遺跡」　秋田市教育委員会　1986年３月

註５　「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　下堤Ａ遺跡」　秋田市教育委員会　1988年３月

註６　「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ　上ノ山Ⅱ遺跡」　秋田県文化財調査報告書第166集　秋田県教育委員会　1988年３月

註７　「杉沢台遺跡発掘調査報告書」　秋田県文化財調査報告書第83集　秋田県教育委員会　1981年３月

註８　平成６年５月11日から10月７日まで発掘調査を実施し、現在整理中である。報告書は平成８年３月刊行予定である。


新しい溝
1号土坑
8号土坑
1号ピット
5号土壙
4号土壙
水道管
コンクリート
2号土壙
3号土壙
7号土壙
1号焼土遺構
6号土壙
2号焼土遺構
新しい整地
1号住居跡
11号土壙
12号土壙
13号土壙
10号土壙
9号土壙
道路
45
44
43
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
0
8 m

第12図　遺構配置図

遺跡遠景（南東→）

調査前（南→）

図版 1

調査区全景（南→）

調査区全景（西→）

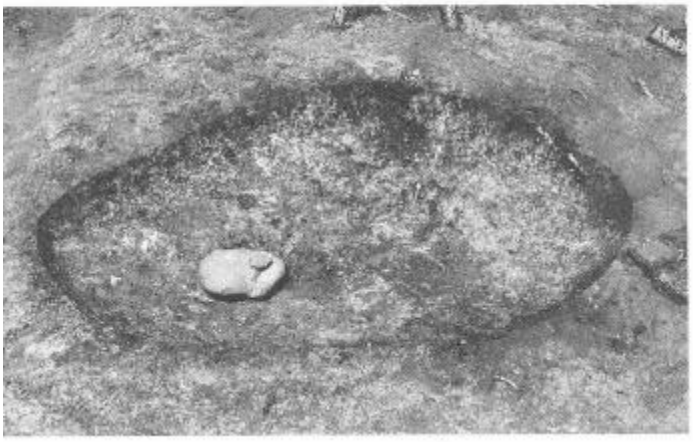
図版 2

調査区全景（北→）

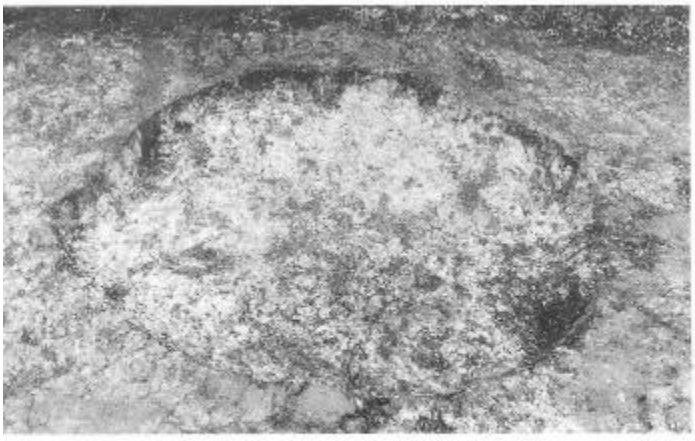
1号住居跡（南→）

図版 3

1号住居跡（西→）



1号土壙（東→）



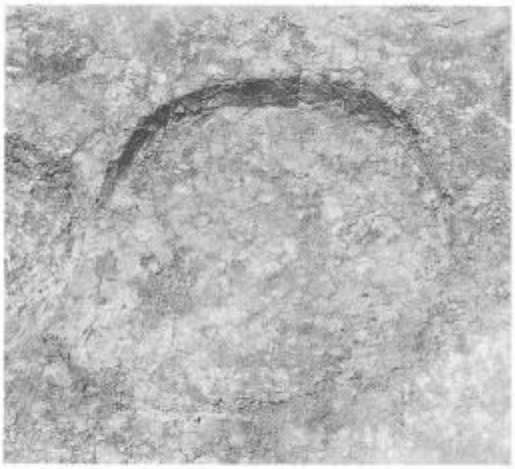
2号土壙（南西→）

図版4

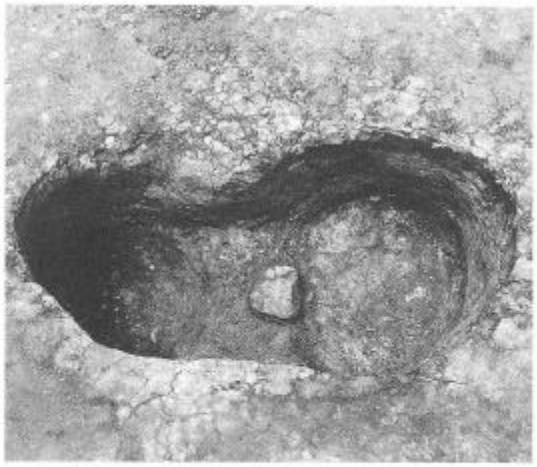
3号土壙（南西→）

4、5号土壙（東→）

4号土壙（東→）



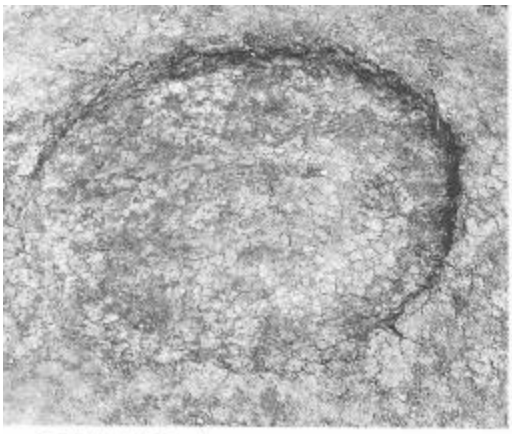
5号土壙（東→）



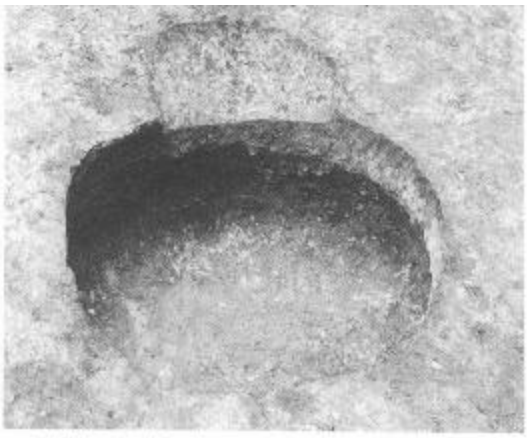
6号土壙（東→）

7号土壙（南→）

図版 5



8号土壙（南→）



9号土壙（南→）

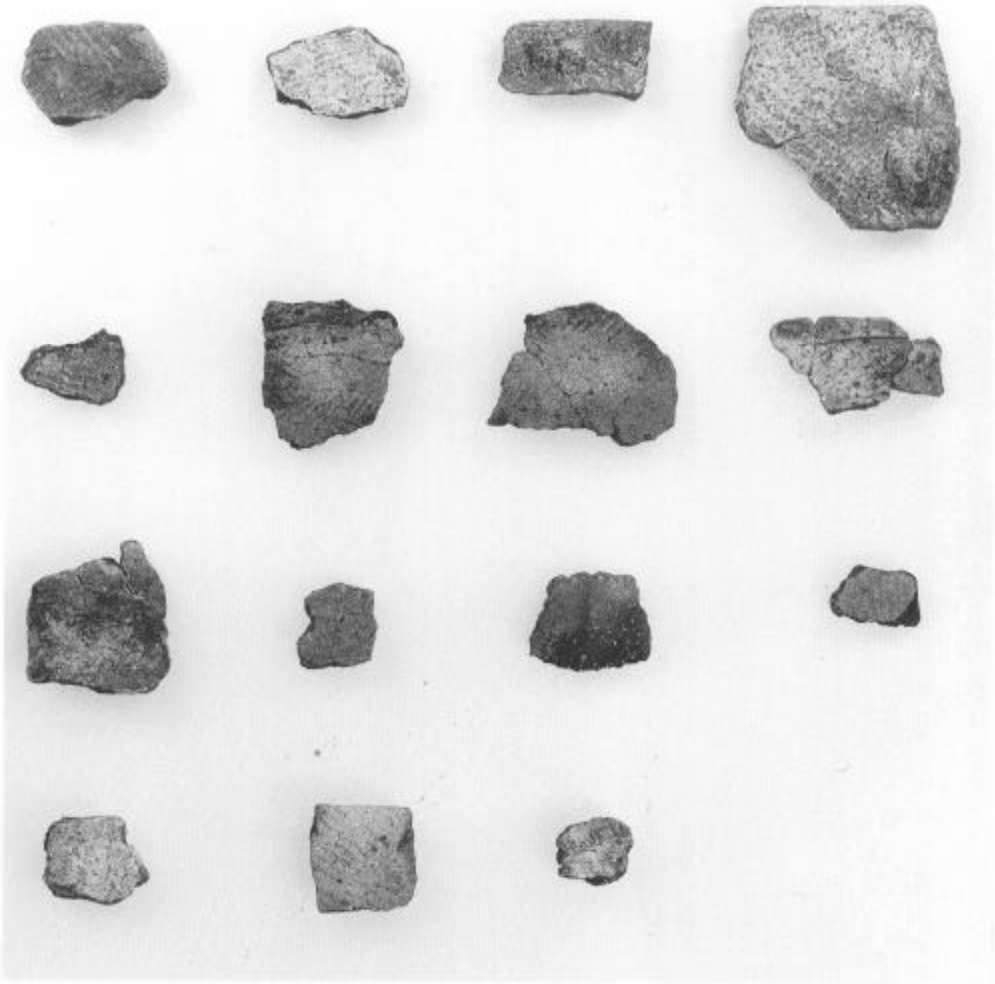
10号土壙（南東→）

11号土壙（南→）

12号土壙（南→）

13号土壙（南東→）

図版 6



遺構内出土土器

遺構内出土石器

図版 7

秋田市
蟹　子　沢　遺　跡
―宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書―

平成7年3月

発行　秋田市教育委員会
印刷　秋田マイクロ写真印刷(株)